

---

# 真保の死、私の気持ち。

真崎麻佐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真保の死、私の気持ち。

### 【Nコード】

N9758B

### 【作者名】

真崎麻佐

### 【あらすじ】

妹、真保の緩やかな死。それは、私にとって初めての身近な死だった。作者の体験をもとにしたフィクション。

(前書き)

暗いです！しかし同じような体験をしたことのある人もいるかもしれません。評価・感想、またあなたの体験やご意見を頂けたら嬉しいです！！

緩やかな死は

現実味を

徐々に

奪っていく

「瀬田くん」

動かない背中に話し掛ける。聞こえたのかは分からないけれど、やっぱり無反応だった。

「今日はもう帰った方がいいよ。ね？」

私は瀬田くんの肩を叩く。彼はやっとコチラをちらりと見た。私は優しく言う。

「瀬田くんまで体を壊しちゃ、いけないでしょ？」

瀬田くんは黙って立ち上がり、一礼してから部屋を出た。

「全く困っちゃうわね、真保」

私は布団の上に寝転がる妹、真保に話し掛けた。もう二度と目を開けることのない妹に。

「貴方の彼氏、相当頑固ね。私、何度同じセリフを言ったか分からないもの」

そう言いながら、ゆっくり真保の頭を撫でてやった。生きてる内にはやったこともないのに、と少し苦笑しながら。

真保が病気にかかったのは二年前。ガンだった。始めの内は通院だけで済んでいたけれど、一年前からはずっと入院していた。

「退院したらパリに行きたいな。パリコレが見たい」

真保はいつも前向きで、退院したら何をするか、ということばかり

考えていた。しかし次第に真保の病気は彼女の自由を奪っていき、死ぬまでの三ヶ月間は自分一人で立ち上がることも出来なかった。そして一昨日の夜、真保はとうとう亡くなった。

瀬田耕平くんは真保の彼氏だった。付き合ってもう一年半になる。瀬田くんは真保の病気を知ってもなお、真保を大切にしてくれた。二人はお互いに好きあっていて、姉としてそれはとても嬉しく、羨ましいことだった。その分、真保を失った瀬田くんを見るのは余計に辛い。彼の落胆は予想以上だった。

「真保、あなたにこんなことを言うのは悪いかもしれないけど、私驚いたのよ。瀬田くんは確かに真保のことが好きだったけれど、最後の方は同情ではないかって思ってたの」

私は真保に話し掛ける。真保から返事は返ってこないけれど。

「瀬田くんは同情なんてしてなかったわね」  
私はまた真保の顔を撫でてやった。

本当の「死」とは何か？

よく言われることだけれど、私にもこの問いの答えがある。

本当の「死」は現実味が帯びてきた時。

それなら真保はまだ死んでない。

真保の死はとても緩やかで、穏やかだった。一年かけて、ゆっくり命を落としていった。私は東京の大学に行っていて、家元を離れていたから、あまり真保のお見舞いには行けなかった。不思議なもので普段から会っていないと、真保が亡くなった後の生活もいつもと変わらない。真保の死が現実味を帯ない。涙は出るのだけれど。

目を開けない真保を見ると、まだ生きているんじゃないか、なんて思ってしまう。やっぱり真保は死んでない。少なくとも私の中では。

真保はずっと、あと三ヶ月、あと一ヶ月と言われてきた。それを聞くたびに胸がドキドキして、息苦しくなった。それがどうだろう。実際に死んでしまったら、その感情が沸かなかつた。緩やかな死が、私から悲しみをも奪っていった。

私は何度も、妹の死の予行練習をしていたのだ。

真保の死を、私は泣けるだろうか？と心配だった。真保の為に泣けるだろうか、と。私の為に泣くのは嫌だった。そんな偽りの涙はいらない。しかし、そんな心配は全くいらなかつた。私達には脳があるけれど、どんなに頭を使って考えたって、最終的に勝るのは体なんだ。体が勝手に涙を流した。

真保のお葬式。とうとうこの日がやって来てしまった。みんな、みんな真つ黒。悲しみの色だ。私は持っていたくもない喪服を買いこたになってしまった。新品の喪服。瀬田くんは学校の制服を着ている。真保の友達も沢山来てくれている。

焼香をあげる。ぐすつ、ぐすつという鼻をすする音があちこちで聞こえる。もちろん、私の隣にいるお母さんも私も同じように泣いている。幼い従兄弟たちはキャツ、キャツと笑っている。私は彼らの幼さが羨ましい。「死」が分らない幼さが羨ましかつた。そして私

はチラリと瀬田くんの方を見る。彼は泣いてなかった。途端に目から涙が零れた。急に何とも言えない感情が込み上げてくる。頭の下がかあっと熱くなった。

一番泣きたい人が、どうして泣いてないんだろう？

瀬田くんが我慢している姿が痛々しい。この前まではあんなに落ち込んでいたのに。私の目からは瀬田くんの分まで涙が零れた。

今日、私の中で真保が死んだ。

焼かれて、骨だけになった妹。生前の面影なんて、当たり前だけど全くない。ああ、もうこの世に真保はいないんだな。

残された骨が私に現実味を与える。

もう真保はいない。

気がついたら、また涙が止まらなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9758b/>

---

真保の死、私の気持ち。

2011年1月20日04時53分発行